

「自カヲ以テ 改良進歩ヲ期スヘシ」
—水路部創業方針と業務の発展—

京都女子大学 文学部史学科
准教授 小林 瑞穂

【講演要旨】

水路部は、1871年（明治4）の水路局としての創業から1945年（昭和20）の海軍解体に至るまで、明治期の一時期を除いて海軍大臣隷属機関として水路業務を担った。海軍と民間に水路図誌を供給する国内唯一の機関であり、近代日本にとって重要な業務を担っていたことは、「水路部」という名称に「海軍」という冠称が付されなかったことにも表れている。

水路局の初代局長（部長）として水路業務にあたった柳檜悦は、「水路事業ノ一切ハ海員的精神ニ依リ徹頭徹尾外国人ヲ雇用セス自カヲ以テ外国ノ學術技芸ヲ選択利用シ改良進歩ヲ期スヘシ」という方針を掲げた。柳の創業方針には、日本の水路業務構築を目指す強い決意と、眼前に横たわる数々の困難に立ち向かう覚悟が表れていると言えよう。

水路部は海軍と民間に向けて海の基本情報を提供する重要な役割を担っていたにも関わらず、その歩みは必ずしも順調と言えるものではなかった。日本海軍と海運界の拡張によって水路部の業務は繁忙となっていくが、一方で海軍省と水路部の間で水路業務に対する認識の相違が生じるようになり、水路部の業務に影響が出ることもあった。特に、第一次世界大戦後の国際水路会議への参加と国際水路局への加盟は、両者の認識の相違が明確に表れた。

水路部は逆境にあっても工夫して業務の改善と問題解決を試み、時に海軍中央に意見を主張して業務を遂行し、発展させた。このような水路部の姿は、柳が創業方針で示した決意と覚悟の継承と言えるものであった。水路部は関東大震災からの復興を記念して、1930年（昭和5）に柳檜悦の胸像を設置した。胸像台には柳の創業方針が刻まれた。胸像の製作と創業方針への注目は、それまでの水路部の歩みを振り返る作業であると共に、水路部のさらなる発展を目指す意図が込められていた。創業方針は、水路部の精神的支柱としての役割を担い、継承されていくことになる。